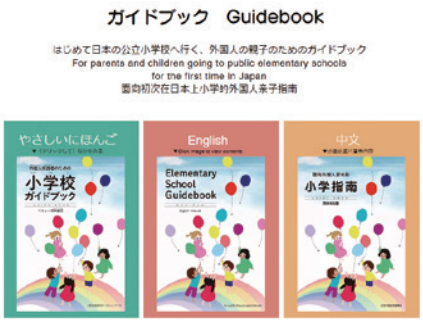
文京多言語サポートネットワーク

坂本 昌代

Bチャレについて

文京の「B」、チャレンジの「チャレ」から「Bチャレ」。文京区社会福祉協議会の助成制度である、文京区提案公募型協働事業の愛称です。文京多言語サポートネットワークは、外国人住民との新たなつながりを創出し、多文化共生社会実現への一助となることを目指し、二年連続助成を受け、活動してきました。

文京多言語サポートネットワークは、二〇〇五年に設立された市民団体で、これまで都内に住む外国人から生活上の相談にのるほか、多言語による防災訓練、母子手帳の翻訳などを行ってきました。外国人住民の増加に伴い（資料一）、子どもを公立小中学校へ通わせる外国人保護者から、日本の学校についての相談を受けることが増えてきたことから、外国人住民にとって公立の学校へ入ることは地域社会への入り口であると考え、多言語による就学ガイドブックの作成と相談会の実施から始めることにしました。



インターネットで見られる多言語の就学ガイドブック

就学ガイドブックの作成

学校へ提出する様々な書類の記入や、指定の持ち物の準備は、私たち日本人保護者にとっても、なかなかに骨の折れる仕事です。

プールカードに体温を記入せず、子どもがプールに入れない。学校へお菓子を持って来てしまう。必要な持ち物が揃えられない・・・。私がこれまで小学校の初期指導員（資料二）をする中で出会った事例です。子ども、保護者、そして学校で日々対応する先生の助けになるようなガイドブックを作りたい。十年前に同様のガイドブックを発行し、支援を続けて来た三鷹市のピナット～外国人支援ともだちネットのアドバイスを受け、内容について話し合いを重ねました。特にこだわったのは、持ち物と保護者の役割のページです。

持ち物を写真でわかりやすく解説

持ち物は、校帽の色や、体操服に縫い付ける名札の位置、ランチョンマットのサイズなど、学校による違いが多くあります。細かな違いよりも、どんな持ち物が必要なのか、分かりやすく写真で伝えることを重視しました。

また、保護者の役割は、日本人にとっては当たり前のことでも、国による違いが大きい部分です。勉強は学校で教えてもらうもので、保護者が家庭でみる習慣がない国もありますし、日々の連絡をSNSなどで担任の先生と保護者が直接やり取りするのが普通という国もあります。子どもが書いて来る連絡帳やお便りに目を通し、翌日の時間割をいっしょに揃えることが、まず大切ですよと丁寧に説明する必要があります。

就学相談会・パパママカフェの実施

英語、中国語、そして「やさしい日本語」の三言語で作成したガイドブックはインターネット上に公開し、新入学の四月と、海外からの転入が多い九月にあわせて、相談会も開くことにしました。今年はコロナ禍での開催となりましたが、オンライン参加も受け付け、予約制の個別相談会という形で行いました。

見えてきたのは、コロナによりつながりが断たれた保護者の姿でした。幼稚園や保育園の送迎時に交わす立ち話。保護者会や行事。日本語教室での地域の人との会話。こういった機会が失われた中で、相談会では「先生や友達の話すことは分かっているようだが、自分からは日本語を話さない。このままで大丈夫だろうか。」「PTA活動は何をしますか。難しい役目を頼まれたら、どうしたらいいでしょうか。」など、気になっていた事が保護者の口から次々と出て来ました。

そこで、ざっくばらんな疑問質問を話す場としてパパママカフェをオンラインで試してみることにしました。「子どもにどんな本を読ませたらいい？」「日常会話はいいけれど、文章が書けるようにならない。」「公立と私立の違いは？」など、様々な悩みや質問が出ました。その中から、十一月が区立中学校の希望校調査票の提出期限であることから、まずは「学校選択制ってなに？」をテーマに、第一回オンラインパパママカフェを十月に開催しました。対面で集まることが難しく制約はありますが、一つ一つのつながりを大切にしていきたいと思います。

感染症対策の上行われた９月の個別相談会

「やさしい日本語」でサポート

これまでの私たちの活動は多言語による支援が主でした。文京区に住む外国人を国籍別に見ると、中国・韓国・ベトナムの上位三カ国が七割を占めています。しかし、残る三割は九十の国と地域の出身者という状態で、全ての言語で情報を提供するなど、不可能です。

そこで役に立つのが、日本に住む外国人も「易しく」理解できるように、「優しい」気持ちで書き換えた日本語、「やさしい日本語」です。（資料三）全ての情報を各国語に翻訳して伝えるのは膨大な手間がかかりますし、専門性が必要です。けれども、「やさしい日本語」なら、一文を短くする、平易な表現を用いる、漢字にふりがなを振るなど、ちょっとしたコツさえつかめば、誰でも、今すぐ、身近な外国人をサポートすることが可能になります。

例えば、災害時の、「氾濫」や「余震」といった言葉は、難しい語彙です。「給水車」が来ても、「炊き出し」をやっていても、その言葉を知らなければ情報は届きません。「水はありますか。○時に、△△公園に車が来ます。水をもらうことができます。」と声を掛けてくれる人が近所にいたら、どれほど心強いことでしょう。

今後の活動

文京区の小中学校にも日本語学級があって、子どもたちがしっかり日本語を学べるといいな。各校にサポーターがいて、転入学時に支援できるといいのに。外国人パパママによる多言語読み聞かせも楽しそう。実現したいアイデアは尽きません。就学ガイドブックに加え、学校文書の書き方動画も作成したので、多くの皆さんに知っていただくための活動も必要です。

外国人にとって住みやすい文京区は、日本人にとっても住みやすい街であるはずです。多文化共生社会の実現に向けて、一人一人にできることを、いっしょに探してみませんか。

文京多言語サポートネットワーク
https://www.facebook.com/bunkyotagengo
就学ガイドブック
https://bunkyotagen5sn.wixsite.com/info

資料一、文京区の外国人住民は一一六三五人。二十人に一人が外国人住民です。（令和二年一月現在、文京区人口統計資料より）。
資料二、外国から転入学した子どもの日本語指導や、母語での通訳を行う指導員。市区により時間数や支援内容は大きく異なります。
資料三、「やさしい日本語」科研グループホームページより